

2022年11月15日 編集発行：日本国際理解教育学会広報委員会
 〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 曾我幸代研究室気付
 TEL：052-872-5154 E-mail：jaie.jimu.office@gmail.com
 Website：http://www.kokusairikai.com/ Facebook：日本国際理解教育学会Facebook

目次

• 会長挨拶	1	• 第31回研究大会参加記	5
• 第31回研究大会報告	2	• 2022年度総会報告	7
• 第31回研究大会公開シンポジウム報告	3	• 理事会報告	13
• 第31回研究大会特定課題研究報告	4	• 事務局通信	14
• 研究奨励賞受賞挨拶文	4		

【会長挨拶】

日本国際理解教育学会のDNA

会長 永田 佳之

去る6月11日に日本国際理解教育学会第31回研究大会に併せて開催された総会にて第7代の日本国際理解教育学会会長を拝命いたしました。微力ではございますが、皆さまと共によりよい学会づくりに励んでまいりたいと思っております。3年間、どうか宜しくお願ひ致します。

会長職に就くにあたり、自問してみたことがあります。それは、日本国際理解教育学会のDNAとは何かという問いです。

たしかに、会員に大学教員のみならず現場の教師が少ないこと、実践者と研究者が共に研究を進めており、そうした協働が研究会や紀要にも反映されていること、韓国や中国と共同研究を推進していることなどを指摘できるのかもしれませんが。しかしこれらは他学会でも見られる特徴でもあります。そうこう考えながら学会の歴史をふり返ると、初代会長が天城勲先生であることは殊の外、意味深長なのではないかと思うに至りました。国内の教育改革はもとより、35年以上にわたり携われたユネスコをはじめ、OECDや日米教育文化会議などで国際的にも活躍した天城先生は、ユネスコの記念碑的な報告書『学習：秘められた宝』の一著者でもあり、元日本ユネスコ国内委員会会長であり、ユネスコ本部職員からも尊敬されていた日本人でした。もちろん文部次官まで務められた官僚という見方もできるでしょうが、本学会にとっての天城先生は国際理解教育の国際的な唱道者であり、世界平和を希求する国際人としてのIsao Amagiなのだと思います。

小生の恩師である千葉泉弘先生（本学会元理事）を通し

て、天城先生とは直接お話しする機会に幾度か恵まれました。いずれも浅学非才の大学院生時代でしたが、その時の会話は今でも鮮明に覚えています。ある日、小生が国際通の行政官としてどのようにお仕事をされてきたのかという無料な質問をしたことがあります。その時の答えは「岩壁を登るように、どこにハーケンを打つかを考えながら仕事をしています」でした。おそらく本学会の創設も打ち込まれたハーケンの1つなのでしょう。

ウクライナやミャンマーの惨状を挙げるまでもなく、国際理解教育をめぐる情勢は待ったなしです。岩壁はより険しくなっているに違いありません。そんな情勢下で、国際理解というミッションを担う私たちはどこにハーケンを打ち進むべきなのか・・・しばらくは正答のない問いを携えながらの舵取りになりそうです。

不確実性の時代の舵取りは困難ではありますが、最後に、この3年間でハーケンを打つべき方向性について私見としてお伝えできればと思います。

本学会には沢山の「宝」がありますが、その1つは現場の教師及び地域の活動家の会員です。そのような会員の皆様が国際的な潮流と出会い、視野を広げ思考を深めていく機会を積極的に提供していきます。また、昨今の厳しさを増す労働環境の中でも地道に実践を重ねておられる会員は少なくありません。そうした会員をはじめ、予測困難な時代を生きる実践者や研究者がエンパワーされるようなネットワークを整えていきます。さらに若手の会員とベテラン会員が活躍する舞台を設け、会員増につなげたいと考えて

おります。

前会長の森茂岳雄先生より受け継いだ課題も優先的に取り組んでまいります。J-Stage（科学技術情報発信・流通総合システム）への登録による会員の皆様の研究成果の迅速な普及、学会規約の整備・改編など、いずれも学会の基盤固めとなる重要課題です。

おりしも本年は国連人間環境会議の開催から半世紀が経つ節目の年であり、皮肉にもその年に勃発したのがウクライナ侵攻でした。激動の国際情勢の中、来年のユネスコ総

会に向けて国際理解教育の原点とも言える「国際教育勧告」の見直しも着手されており、国際理解教育の基盤そのものが変容を迫られています。

混迷の度合いを深める時代であるからこそ、いま一度、初志に立ち戻り、現代の文脈の中でその可能性と課題を見極めながら会員の皆様の学びの活性化と深化に寄与していく所存です。そのためにまずもって必要なのは、お一人おひとりの積極的な参加です。どうか学会活動へのご尽力を惜しまれることのないよう、お願い申し上げます。

第31回研究大会報告

大会実行委員長 多田 孝志

日本国際理解教育学会第31回研究大会は、2022年6月10日（金）～11日（日）にかけて北陸の地、金沢学院大学で開催されました。

コロナ禍により、本大会は、残念ながらオンラインを主とする交流を余儀なくされました。その状況下でも、プレイベント、自由研究発表12分科会、特定課題研究、公開シンポジウムが行われました。参加者は、対面・オンライン累計650名でした。

本大会で、学会の新たな方向を模索したく企画したのが、地域の人々や学生が対面で参加したプレイベントと公開シンポジウムでした。

前者では、「世界とつながる北陸経済～その実態と課題、求められる人材～」をテーマとし、経済と教育とのかかわりを考察しました。第一部では 金沢学院大学経済学部佐藤淳教授により基調講演「人口減少化において地域経済の活力を高めるために」がなされ、第二部では豊田欣吾経済学部教授をコメンテーターに「世界とつながる北陸経済にもとめられる人材」をテーマに、国際化時代のホテル・旅館の運営、世界に日本酒の販売を展開する酒造業、地球規模での循環型社会を確立するため、発展途上国を中心に問題になっている自動車の後始末に関わるプロジェクト、環境技術を生かしつつ人々が暮らす快適な空間と満足される生活づくりに貢献し、東南アジアから欧州まで事業展開する会社などの地元産業の各代表者が、現状報告や世界で活躍する人材育成についての教育界への要望や意見が述べられました。

この北陸経済界からの要請に対して、本学会の森茂岳雄会長（当時）、藤原孝章、釜田聡の3会員およびJICA北陸の米山芳春所長から国際理解教育推進の立場からの、教育と経済の相互協力の意義や今後の人間形成への具体策が述べられました。

公開シンポジウムは、「コロナ後の新たな社会の創造に果たす若者の役割と国際理解教育」をテーマに、小嶋祐侖部会員の司会により進行されました。まず、4名の大学生が若者の政治参加意識の低さの現状と改善策、医師となる立場から医療現場に入ってみての疑問点、ボランティア活動の体験から気づき、感じたこと、教員志望の立場からの未来の教育の方向について提言等について自分たちの思いを発言しました。

ついで、地域に開かれた美術館の活動を展開する吉備久美子（21世紀美術館）、地域の活性化のためのアイデアあふれる企画を推進する吉田一翔（創成ななお）、高校の激減（7校→1校）や少子化がもたらす地域の教育問題に取り組む木村聡（能登高校魅力化プロジェクトリーダー）の3人から、地域活性化のためのさまざまな取り組みとその成果について報告がありました。

これらについて、学会の山西優二、永田佳之、中山京子、石森広美会員から、若者の社会への提言の意義や若者の活動への期待感の高まり、今後の活動へ具体的な示唆等のコメントがだされ、その後、会場の参加者も交え論議がなされました。

今回の大会全体の成果を集約することはできませんが、経済と教育両面からの論議、若者の参加による教育の問い直し試みから、今後の国際理解教育が基調におくべき方向が見えてきたように思われます。その主な点を記しておきます。

個別の情報だけでなく、広い視野から、全体を知る「総合知」の育成が必要であること。多様な視点から深く探究し、ものごとの本質をみとる、また、枠組みを取り払って、新たなものを生み出す体験が重要であること。

青少年に民主主義の基本を根付かせる努力が必要であり、それは、自らが社会の意思決定に参加すること、ま

た、自分たちの活動によって、社会を変革できる体験をすることにより実感として生まれていくこと。

開催にあたり学会本部、地域の人々、学生たちからの多

大な支援をいただきました。大会の進行そのものが、多様との融合、総合知の育成の機会となりました。記して深甚なる謝意を表します。

第31回研究大会公開シンポジウム報告

金沢学院大学 小嶋 祐伺郎

今回の学会シンポジウムは大会テーマを受け、「コロナ後の社会の創造に果たす若者の役割と国際理解教育 ―若者の葛藤と社会参画が生み出すもの―」というテーマのもと、北陸を中心に若者ととも新しい社会や文化の創造に取り組んでおられる次の3名の方をシンポジストとしてお招きした。

- 吉備久美子さん（金沢21世紀美術館）
- 吉田一翔さん（株式会社創生ななお）
- 鈴木聡さん（能登高校魅力化プロジェクトコーディネーター）

また、各地で地域をベースにさまざまな活動に取り組んでおられる、次の4名の若者にも登壇していただき、それぞれの活動への想いや希望、悩みなどを語っていただいた。

- 内島駿介さん（イシカワ事変代表 慶應義塾大学3年）
- 井上伽耶登さん（学生ボランティアlime代表 同志社大学2年）
- 増田奈保子さん（学生医療団体INOCHI前代表 大阪大学5年）
- 山口綾斗さん（金沢学院大学3年）

若者と新しい文化の創造に取り組んでおられる吉備さんは、若者の発想力やアイデアがプロジェクトの推進力となっていること、また、過疎化に悩む地域の再生に若者を巻き込もうとされている鈴木さんは、教師が子どもを指導する「教育」から、教師、子ども、地域が共に学び合い社会を創る「共育」へと転換していくには、若者の潜在的能力を大人が信じて活用すること、そして、塩田など能登の魅力発信に取り組む吉田さんは、高校卒業後、単身イタリアに職人修行に出かけた経験から、若者に「当たり前」やリスク回避ばかりを押し付ける教育への疑問が投げかけられた。

こうしたシンポジストの発言を受け、若者からは、活動実績を評価されながらも「意見は聞いてくれるが予算が伴う政策立案には参加させてもらえない」という社会参画に対する不満や、「学校で実際に役立つことは何も学んでこなかった」という教育への痛烈な批判も聞かれた。指導助言者としてご参加いただいた、早稲田大学 山西優二先生、聖心女子大学 永田佳之先生、帝京大学 中山京子先生、

北海道教育大学 石森広美先生からは、社会の変革や地域や文化の再創造には若者の力が欠かせないこと、これだけの困難な状況にありながらも、大人や社会への信頼を捨てていないことへの希望、大人と若者という対立的見方ではなく、共に社会を再構築していく一員としてとらえていくことの重要性等が述べられた。

コロナ後の新しい社会や文化の再創造には、まさしく「チーム人間」で取り組まねばならないということ、そしてそういう教育をどう構築するのが、今まさに問われているのであり、会の最後を締め括っていただいた多田孝志先生の今後の教育への一言を真摯に受けとめなければならないことを実感する時間となった。

奇しくも、この原稿を書いている時、甲子園の優勝校の監督から全国の高校生（若者）へのエールともいべき言葉が贈られた。今回の、若者の声を聴くというシンポジウムの趣旨を語ってくれたのだとわたしは思う。

最後に、20代の若者をシンポジウムに登壇させるというこれまでにはない企てを、快く承諾していただいた学会関係者の皆様に、心より御礼を申し述べるとともに、趣旨を完徹できず不十分な議論にしてしまった司会進行の勝手をお詫びし、シンポジウムの報告としたい。



第31回研究大会特定課題研究報告

聖心女子大学 永田 佳之

「21世紀の社会変容と国際理解教育」という包括的なテーマのもとに先期の研究・実践委員会が活動して3年が経った。当初より、教育の国際的な潮流と国内の現場の橋渡し役を務めること、不確実性の時代に応答する学びを探究すること、地域から学校教育を捉え直すこと、近代化の過程で周辺化されてきた声や身体知などから頑なになった学びを再考することといった課題に挑んできた。以下は第31回研究大会での特定課題研究を終えた時点での4プロジェクト（政策研究、学び論、地域論、社会変容と身体性）の最新報告である。なお、本研究の総括については年度内に公開予定の最終報告書も参照されたい。

政策研究プロジェクトはユネスコ1974年国際教育勧告を参照点とし日本の「国際理解教育」政策の特質と課題を検証する目的で3つの角度から研究を進めた。21世紀の新自由主義的教育改革の「学力」重視のもと①国内班は国及び自治体等の施策を検証し、「国際理解教育」の「死語」化を指摘した。②シティズンシップ教育班は74年勧告の市民性とSDG4.7の2大柱であるESD、GCEDとの継承関係を国際的な視野で分析し、GCEDは「国際理解教育」の現代版とするユネスコのAPCEIUの見解は日本では一般的ではないことを指摘した。③ユネスコ班では74年勧告の実施状況報告を分析し、日本の報告内容が実態を十分に反映しておらず、今後は市民社会からのチェックが必要である等を指摘した。

学び論プロジェクトの研究の目的は、不確実性が高まる社会における教育とは何かという問題意識のもと、従来の教育活動を支えてきた価値観やものの捉え方を問い返し、自己変容をもたらす学びの環境にみられる特徴を捉えることである。報告では、変容をもたらす学びには、創発がともなうこと、そのプロセスには、実践者と学習者が互いに聴きあうことを通してつくれる主体と主体とのかかわりがあることを共有した。それはかつて批判された「這い回

る」実践の意味ある復権とも呼べる。自己や他者、および事象と改めて出会いなおし、関係性を再構築していく自己変容のプロセスには「内省的観察」や「抽象的概念の活用」が必要とされることも同時に確認した。

地域論プロジェクトは、SD（持続可能な開発/発展）を地域での生活・文化の視点から捉え直し、その生活・文化づくりに求められる学びのありようを描き出すことを目的としてきた。そして研究では、①生活と文化の関連からSDを捉えること、②地域における学びのダイナミズムを示すこと、③協働実践研究にみる研究方法を示すことの3点を意識してきた。具体的には、「益子：風土に根ざす地域づくり・学びづくり」「隅田川：地域で紡ぐいのち・仕事・暮らし」「民話を通じた地域の学び」という3つのタスクチームで進めてきた。地域にみる動的な様相には、これまでの教育を捉えなおす糸口がある。平和に向けての文化、学びをつくり出していくことが国際理解教育の課題であり、私たちはその課題に資する地域実践研究のとば口に立っていることを共有した。

社会変容と身体性プロジェクトは、身体が全ての行為の台座であるにもかかわらず身体性が疎外されているとの認識のもと、国際理解教育における身体感覚、感情、情動などの位置づけを問うことを研究目的としてきた。研究の過程ではボディワークや音をテーマとしたワークショップ、権力と身体の関係についての学習会を含む企画をもとに身体性を多角的に検討した。これらを通して、身体性を耕すことが学びを単なる記号の操作の習熟を超えて、ストーリーや葛藤を通して自己・他者・世界に位置づける土台であるとの気づきを得た。生権力が支配する現代社会においてエージェンシーを育むためには、国際理解教育においても身体性へのアウェアネスを高め、政策レベル等を含めたさまざまな視点からの検討が必要であることを確認した。

研究奨励賞受賞挨拶文

海老名市立東柏ヶ谷小学校 東 優也

この度は、小稿『人種』をテーマにした小学校における実践—『人種』概念の捉え直しを試みる』（『国際理解教育』Vol.26 掲載）に対し、大変名誉ある賞に選出いただきまして誠にありがとうございました。また、本賞選出にお

いて理事会等、役員の皆様の貴重なお時間をいただき、御協議いただきましたことも併せて御礼申し上げます。

本実践は、小学校第5学年での実践でした。彼らも今年度中学3年生、高校受験を控えています。これからを担

う若者の中に「人種」概念を捉えなおす思考や行動意識が育っていることを願います。そして拙い実践に一生懸命向き合い、議論を重ね、学びを深めようとしてくれた39名の教え子に感謝の意を伝えたいと思います。

私は、2015年、当時大学学部生時に本学会への入会をご承認いただきました。中央大学での第25回研究大会に分科会とポスターセッションでの発表をさせていただいたのが初の学会での研究活動でした。初めて味わう空気と表現しきれないくらいの緊張は今でも鮮明に思い出すことができます。それから、本学会の研究大会はもちろん様々な研究活動やご提供くださる情報から多くのご示唆をいただき、贅沢な環境で学ばせていただいております。本学会は創立から30年が過ぎ、これまで研究大会や学会誌等、社会や世界の動向を確実に捉えた国際理解教育の研究や実践が数々報告されてきましたが、緻密な研究や豊かで素晴らしい実

践から多くのことを学ばせていただいております。学会員の諸先輩方からは、いつも温かいご指導をいただき、本当に素晴らしい学会において、今回このような賞をいただけることは、この上ない喜びであります。個人的になりますが、これまで本賞を受賞された先生方には、日頃より共同研究等でお世話になっている方々がおられます。続いて受賞できたことも、何かの縁を感じつつ、嬉しさを倍増させる要素でもありました。

最後になりますが、学問の楽しさや奥深さを常にご教示いただいている指導教官である帝京大学・中山京子先生に感謝申し上げます。また、いつも温かくかつ厳しいご指導くださる先生方にも厚く御礼申しあげるとともに、今後も変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますことをお願いしたく存じます。名誉ある賞に恥じぬよう、今後も実践と研究に励むことを誓い、受賞の挨拶とさせていただきます。

第31回研究大会参加記

新潟県立長岡商業高校（非常勤講師） 関 愛

学校で実践を重ねていると、時に自分の頭の中だけで考え続けることに限界を感じることもある。日本国際理解教育学会がもつネットワークや研究大会という場は、情報交換だけではなく、理論を学び、実践を研究する「目」を養う機会として常に自身を支えてもらっている。

社会活動は、新型コロナウイルス禍でも何ができるかを探りながら前へ歩むようになった。第31回研究大会は、オンラインを主としつつも、3年ぶりに一部対面での実施となった。公開シンポジウムにおいては、クラウドサービス(Slido)を活用した新しい試みもあった。「現地に行って参加したかった」と思いながらオンラインで参加をしていた私にとっては、「ただ見ているだけ」ではない形で参加できたことは、さらに得るところが多いものとなった。今回のシンポジウムの主題は「コロナ後の新しい社会の創造に果たす若者の役割と国際理解教育—若者の葛藤と社会参画が生み出すもの—」であった。本テーマは、これからの国際理解教育への視座を高めてくれるものであったと感じている。パネリスト6名による発表・対話を伺いながら、私自身は高校の教育に携わっている立場から「個人の意思決定と教育との関わり」を考え、「社会・未来の創り手を育むために必要な学びとは何か」ということを熟考した。特に、社会参加意識が高い大学生4名の姿勢に感嘆し、「何（どんな背景）が彼らを突き動かしているのか」と興味深かった。私たち大人（教師）の役割は何だろうか、教育の役割は何だろうか、と自問しながら国際理解教育の価値を

改めて考えている。

自由研究発表からも、また多くの知見をいただいた。中山京子会員（帝京大学）の発表では、「日本人は太平洋の『お世話』になっている」という言葉が目から鱗であった。構造的に生み出されている問題に、私も含めた多くの日本人が気づいていないことへの危惧と課題解決に向けた態度を育成していかななくてはならない、という気づきを与えていただいた。国際理解教育の授業づくりに向けて、新たなテーマ（教材）と出会えたことが何よりの収穫であった。石森広美会員（北海道教育大学）の発表からは、教科書を学ぶことに終始してしまう英語の授業から異文化理解や国際理解の視点をどう一歩踏み込んでいくかという点について、学習指導要領（目標）の考察という観点から多くの視座を与えていただいた。まさに英語教師としての私の葛藤と重なる内容であり、考え方が広がったとともに、「グローバルマインドを育む姿勢を教師が見せていくことが大切」という石森会員の言葉に非常に鼓舞され、前を向くことができた。

2日目午後の特設課題研究では、4つのプロジェクトの発表があった。会の中では、ブレイクアウトルームを活用して少人数で対話をする場面も設けられた。私のグループでは、特に「政策研究プロジェクト」について、活発に意見交換がなされた。「実態との乖離が生まれてしまうのはなぜか」ということを大学教員、高校教員、大学院生それぞれの立場から議論、意見共有ができた時間は国際理解教育

の本質を見つめ直すうえでも意義あるものであった。

ユネスコ1974年国際教育勧告から50年近くが経過し、現在見直しが進められている。グローバルイシューが明確化される中で、私たちが取り組む教育活動は社会をどのように支えていくのか、改訂への今後の動向により注目するとともに、よりよい社会の実現に向けて、私自身もより一層自己研鑽に励んでいきたい、そんなことを強く思った2

日間であった。

最後になりますが、このような充実した研究大会をつくってくださった多田孝志大会実行委員長、そして大会運営に関わられた日本国際理解教育学会会員の皆様、大会開催校として大会運営をサポートしていただいた金沢学院大学の関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

第31回研究大会参加記

黒部市立村椿小学校 山崎 優菜

私は大学3年生から国際理解教育を学んでいる。国際理解教育と出会い、学問はとても楽しいと知った。国際理解教育を学ぶことを通して、日常生活の中にも学びが隠れていることを知り、大学を卒業しても自分の好きな国際理解教育を学び続けていきたいと思った。

しかし就職した途端、日々の生活で精一杯になり、国際理解教育を学び続ける難しさを実感した。そんな中、大学時代の恩師に国際理解教育学会の存在を教えていただいたことをきっかけに、小学校教員である自分が国際理解教育について学び、それを教え子たちに還元したいと思うようになり、入会した。中山京子会員（帝京大学）の研修会に参加させていただき、学びを生かして人の肌の色の多様性についての授業実践を行い、第30回の研究大会で研修参加者の行動化の一例として話させていただいた。さらに、学会の社会連携事業の一つである日本・韓国・中国の三ヶ国ストーリーテリングプロジェクトに参加させていただき、プラスチックゴミで苦しむ動物たちを題材にした絵本を用いた授業実践を行った。学会活動に参加することで、考えが深まり行動力が身につく、成長していることを実感する。

私にとって研究大会への参加は、今年で2回目だ。研究大会に参加するにあたり、発表者の考えと自分の考えや経験を擦り合わせながら、自分の考えを深めることと発表をよく聞いて何かしらの質問をして食らいつくことの2点を自分の目標としていた。普段は、平仮名や足し算のことばかり考えている頭（現在1年生担任）で、突然、国際理解教育の世界にやってきたこともあって、最初は固まった頭を解すことから始まった。『現代国際理解教育事典改訂新版』を片手に発表者が放つ言葉をひたすら調べた。質問の時間では、怖気づいてしまう気持ちもあったが、目標を思い出し、勇気を出して質問した。私の質問がその場にとって、有意義な質問だったかはわからないが、発表者の方

が、分かり易い言葉に置き換えて答えてくださったり、質問内容を更に掘り下げてお話ししてくださったりしたことで、実りのある分科会になったと感じる。私の思考は、徐々に国際理解教育の世界へと戻ることができた。

私は、1日目の第2分科会に参加した。周星星会員（岡山大学大学院）の発表では、学生がコロナ禍での留学生の受け入れの問題についてディベートすることを通して、他の問題に対する価値観も調整することができたという結果が分かった。以前、担任をしていた児童がマスクを着けていない国に批判的だったが、もし、価値観の調整ができるような話し合いを重ねる経験を与えていたら、そのような態度にはならなかったのではないかと考えた。発表を聞き、これから様々な人々が交じり合う社会において、価値観を調整する力は重要だと思った。

藤田ラウンド幸世会員（横浜市立大学）と謝敷勝美会員（宮古島市立久松中学校）の発表では、宮古語（みゃーくふつ）を継承するために、どのような実践を行っているかが分かった。実践内容を聞いていると、謝敷会員の、宮古語を継承したいという思いが強く伝わってきた。児童生徒に慣れ親しんで欲しいと思ったら、毎日の働きかけや楽しんで学ばせることが重要だと感じる実践であった。島の方々の言語を守ろうとする気持ちと教育をどう絡めるかが示され、興味深く聞かせていただいた。

研究大会に参加し、日々のニュースや生活の中にも国際理解教育が広がっていること、できることから取り組むことが大事だと分かった。次は、中山会員が大会発表で参加を呼びかけた太平洋教材開発の研究会に参加し、知見を広げ実践に繋げ、研究大会の場で発表できるように努めたい。

最後に、このニューズレターへの寄稿を通して研究大会をじっくり振り返る機会をいただいたことに、御礼申し上げます。

2022年度総会報告

2022年6月11日に金沢学院大学において開催された第31回研究大会時に、本学会初めてのオンラインによる総会を開催しました。2022年度から2024年度までの新役員体制、2021年度事業報告・決算報告、2022年度事業計画・予算案、学会規約改正案が審議され、すべて承認されましたので報告します。

2022年度～2024年度 日本国際理解教育学会理事会・委員会体制

【役員：理事】（選挙選出理事12名、会長推薦理事6名、計18名）

〈会長〉

永田佳之（聖心女子大学）

〈副会長〉

釜田 聡（上越教育大学）

中山京子（帝京大学）

〈常任理事〉

石森広美（北海道教育大学）

桐谷正信（埼玉大学）

小林 亮（玉川大学）

曾我幸代（名古屋市立大学）

〈理事〉

（選挙選出）

菊地かおり（筑波大学）

藤原孝章（同志社女子大学）

嶺井明子（前筑波大学）

森田真樹（立命館大学）

山西優二（早稲田大学）

（会長推薦）

伊井直比呂（大阪公立大学）

市瀬智紀（宮城教育大学）

橋崎頼子（奈良教育大学）

原 瑞穂（上越教育大学）

福山文子（専修大学）

松倉紗野香（埼玉県立伊奈学園中学校）

【役員：監事】

林 敏博（名古屋市立大学）

天野幸輔（名古屋学院大学）

【事務局】

〈事務局〉

（事務局長）曾我幸代

（事務局次長）孫 美幸（文教大学）

和田俊彦（跡見学園中学校高等学校）

【協力委員】

阿部裕子（東京福祉大学）

岩坂泰子（広島大学）

風巻 浩（東京都立大学）

上別府隆男（福山市立大学）

川口広美（広島大学）

神田和可子（聖心女子大学）

渋谷真樹（日本赤十字看護大学）

姜 英敏（中国・北京師範大学）

タスタンベコワ・クアニシ（筑波大学）

坪田益美（東北学院大学）

南雲勇多（東日本国際大学）

松尾知明（法政大学）

由井一成（早稲田大学）

横田和子（広島修道大学）

吉村雅仁（奈良教育大学）

【海外学会等連携】

金 仙美（韓国・中央大学校）

姜 英敏

【委員会・各種事業】（◎は委員長、○は副委員長）

研究・実践委員会：◎石森広美、○市瀬智紀、

風巻浩、南雲勇多、橋崎頼子、吉村雅仁、由井一成

紀要編集委員会：◎桐谷正信、○森田真樹、川口広美、渋谷真樹、坪田益美、松尾知明、松倉紗野香

国際委員会：◎小林亮、○嶺井明子、阿部裕子、上別府隆男、タスタンベコワ・クアニシ、原瑞穂

広報委員会：◎中山京子、○福山文子、神田和可子、菊地かおり

社会連携事業：◎藤原孝章 岩坂泰子

異己プロジェクト事業：◎釜田聡 姜英敏

重点課題事業：◎山西優二 ○伊井直比呂 横田和子

2021年度事業報告

1. 第30回研究大会開催

日本国際理解教育学会第30回研究大会は、2021年6月11日（金）・12日（土）・13日（日）の3日間、玉川大学にて開催された。コロナ禍のため、2020年度に玉川大学で開催を予定していた第30回研究大会は中止となり、1年延期しての開催となった。また、今回は、全イベントがオンラインで行われ、さらに異文化間教育学会第42回研究大会との合同大会として開催されるなど、本学会として初めての試みが模索される状況において、小林亮大会実行委員会委員長をはじめとする玉川大学関係者の皆様のご尽力によって、日本国際理解教育学会だけで計174名が参加するなど、盛況の会となった。

6月11日（金）のプレイベントは、本学会国際委員会の取り組む『「異己」プロジェクト』の総括を主な目的に、日中韓オンライン交流会として開催された。

6月12日（土）と13日（日）には、14のテーマ別セッションに分かれて、計57件の自由研究発表が行われた。また、6月12日（土）には、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）によるワークショップ「国際交流で変容する学びを」や、斎藤珠里ユネスコスクール課長による基調講演を含めた公開シンポジウムが、6月13日（日）には、「21世紀の社会変容と国際理解教育」をテーマとする特定課題研究が開催された。第30回研究大会の詳細は、学会会報の54号（2021年11月発行）に掲載している。

2. 各委員会事業報告

(1) 紀要編集委員会

①学会紀要28号の編集と刊行（2022年6月発行）

特集テーマ「感染症と国際理解教育」

研究論文、特集研究論文等の各種論文ほか、第30回研究大会報告、委員会報告、新刊紹介などを掲載

②学会紀要29号の特集テーマの決定（2023年6月発行予定）

特集テーマ「ICTと国際理解教育」

③第5回日本国際理解教育学会奨励賞の決定

受賞会員：東 優也

受賞対象論文：『国際理解教育』Vo.26 (2020) 掲載

区分：実践研究論文

「人種」をテーマにした小学校における実践 - 「人種」概念の捉え直しを試みる -

(2) 研究・実践委員会

①4つの研究プロジェクトの推進

「21世紀の社会変容と国際理解教育」という包括的なテーマのもとに立ち上がった4つの研究プロジェクト

（政策研究、学び論、地域論、社会変容と身体性）の研究推進と、最終年度にあたっての総括を行った。各プロジェクトの世話人を中心に、積極的に公開研究会等が企画され、活発な活動が行われた。

○政策研究プロジェクト（世話人：永田佳之副会長、嶺井明子理事）

○学び論プロジェクト（世話人：曾我幸代理事、成田喜一郎理事）

○地域論プロジェクト（世話人：山西優二理事、孫美幸会員）

○社会変容と身体性プロジェクト（世話人：和田俊彦会員、横田和子会員）

研究成果は、研究大会の特定課題研究で学会員に共有するとともに、成果報告書を刊行する予定。

②公開研究会の開催

2021年12月には、ユネスコ加盟70周年記念公開研究会「ユネスコの最新報告書：2050年に向けた教育とは？」を開催するとともに、同公開研究会のフォローアップ企画として「私たちの未来を共に再想像する：ダイアログの時間」を開催した。

(3) 国際委員会

①中国・韓国学会との連携促進

○釜田常任理事が窓口となり調整し、2021年11月13日に開催された韓国国際理解教育学会第22回国際学術大会に、本学会から森茂会長ら6名が参加した。また、「異己」プロジェクトを通じた中国・北京師範大学との連携や第31回研究大会（金沢学院大学）への韓国国際理解教育学会及び中国からの参加者と連絡調整を行った。

②共同プロジェクト実施

○日中韓共同「異己」理解・共生授業プロジェクトを推進。6月の第30回研究大会、11月韓国の研究大会において、プロジェクトの研究交流を行った。

③国際レベルの教育政策動向の把握

○国際委員会委員によって情報の収集に取り組み、その成果は学会紀要に掲載した。

(4) 広報委員会

①J-Stage公開準備

本学会の過去の紀要に掲載された論文をJ-Stageに公開するための準備を行った。J-Stageへの申請過程において、出版社等とさらに詳細を詰める必要が判明し、審査中に新体制に移行する時期的な課題も勘案し、J-Stageへ

の申請は新体制への移行後に行うこととなった。

②ウェブサイト、フェイスブックの更新

研究大会情報、Newsコーナーなどについて随時更新した。また、フェイスブックによる情報提供も行った。

③ニューズレター 54号の発行（2021年11月発行）

54号は、学会創設30周年記念号として位置づけ、歴代会長から寄稿いただいた。

(5) 社会連携授業

① JICA地球ひろばとの連携

2018年度より、社会連携事業として再編し、新しくJICA地球ひろばとの連携事業を開始した。地球ひろばの主催する「国際理解教育/開発教育指導者研修プロジェクト」に、学会会員が講師として協力した。

②海外子女教育振興財団の文部科学省委託「帰国教師ネットワーク構築事業」への協力

2020年度から継続しているが、2021年度は、国際理解教育の概要について講演動画の作成に協力した。

③ユネスコバンコク主催のアジア太平洋地域のネットワーク構築事業への協力

2021年度韓国国際理解教育学会（KOSEIU）と協力・協働し、ユネスコ（バンコク）、日本国際理解教育学会（JAIE）の3者の共催で、「アジア太平洋地域グローバルシティズンシップ教育ネットワークオンラインフォーラム」を開催した。

④日韓中ストーリーテリング・プロジェクトへの参加

APCEIU（アジア太平洋国際理解教育センター）の補助金の支援を受けた韓国国際理解教育学会によるプロジェクトに参加した。

⑤APCEIU主催の日韓教員交流事業への協力

松倉紗野香会員がコーディネーターとして参加した。

3. 理事選挙の実施

選挙管理委員会を発足させ、2021年度～2023年度の役員を選出する理事選挙を2021年10月～11月にかけて実施した。厳正な選挙実施と開票作業の結果、12人の理事が選出された。投票率は、31%であった。2022年1月には、選挙選出理事の互選によって新会長・新副会長候補者を決定した。

4. 事務局報告

①会員動勢

2021年度新入会員：37人

2021年度退会会員：14人 1団体

3年以上会費未納により退会扱いとなった会員：21人

会員総数（2022年3月31日時点）：439人

②理事会・常任理事会の開催

・2021年5月15日（土）第1回常任理事会（オンライン）

・2021年6月11日（金）第1回理事会（オンライン）

・2022年1月10日（月）第2回理事会（キャンパスインベーションセンター東京）

・2022年3月27日（日）第3回理事会及び新理事による打ち合わせ（オンライン）

* 2021年度は『現代国際理解教育事典（改訂新版）』の編集を常任理事会メンバーが担っていたため、事典の編集委員会開催に合わせ、必要に応じて、常任理事による打ち合わせを行った。

③会報、学会紀要、年会費振込依頼文書等の発送

④その他の活動

2021年度 収支決算報告（2021年4月～2022年3月）

I. 収入の部

科 目	2021年度予算額	2021年度決算額	備 考	2020年度決算額
入会金	90,000	110,000	3000×36人、1×2000（入会金1000円不足会員有り）	72,000
年会費	3,450,000	3,204,000	学生4000×44、正8000×356、団体30000×6	3,312,000
雑収入	10,000	9	利子3（2021年4月）、6（2021年10月）	2,246
当期収入合計（A）	3,550,000	3,314,009		3,386,246
前年度繰越金	7,454,607	7,454,607		6,145,805
収入合計（B）	11,004,607	10,768,616		9,532,051

II. 支出の部

科 目	2021年度予算額	2021年度決算額	備 考	2020年度決算額
1. 事業費	3,140,000	1,421,704		1,764,128
大会運営補助費	400,000	400,000	2022年度第31回大会会場校へ	100,000
紀要刊行費	500,000	500,000		500,000
会報刊行費	90,000	80,080		80,080

理事会費	500,000	107,904	理事会交通費、選挙選出理事打ち合わせ交通費	0
紀要委員会費	300,000	19,010		14,624
研究・実践委員会	350,000	212,972		294,230
国際委員会	270,000	0		257,996
広報委員会	520,000	100	事務局口座への返金振込手数料	517,198
国際交流費	60,000	0		0
学会賞	0	0		0
社会連携事業	150,000	101,638		0
2. 管理費	590,000	477,159		247,316
事務局経費	10,000	7,846	会計監査交通費、供花代など	14,839
事務局人件費	120,000	68,000	1,000×68h	39,000
通信費	170,000	170,944		147,791
設備・備品費	0	0		0
消耗品費	10,000	9,454		1,936
会議費	50,000	7,431		0
旅費交通費	5,000	38,440	金沢学院大学会長訪問費用	0
印刷製本費	45,000	41,800	学会封筒追加印刷費	0
教育関連学会会連絡協議会年会費	10,000	10,000		10,000
雑費	10,000	3,940	振込手数料など	3,280
HP管理費	30,000	21,670		30,470
選挙管理費	130,000	97,634	郵送費、選挙管理委員交通費など 2018年は、122,649円	0
3. 予備費	60,000	0		0
4. 30周年特別事業費	50,000	0		66,000
支出合計 (C)	3,840,000	1,898,863		2,077,444
当期支出差額 (A)-(C)	▲290,000	1,415,146		1,308,802
次期繰越収支差額 (B)-(C)	7,164,607	8,869,753		7,454,607

公文財助成金会計

収入	800,000	
支出	566,632	現代国際理解教育事典買取
	104,060	委員交通費(2021年12月)
	86,152	委員交通費(2021年1月)
	36,660	編集委員食事費
	6,496	消耗品費
合計	800,000	

2022年度事業報告

1. 第31回研究大会開催

開催校：金沢学院大学 大会実行委員会委員長：多田孝志 元学会長

日 程：2022年6月10日（金） プレイベント

2022年6月11日（土） 自由研究発表、総会、公開シンポジウム

2022年6月12日（日） 自由研究発表、特定課題研究

* 研究大会は、オンライン開催とし、プレイベントと公開シンポジウムのみ対面会場からライブ配信を行う。

①学会紀要29号（特集「ICTと国際理解教育」）の編集と刊行

②学会紀要30号の特集テーマの審議と決定

(2) 研究・実践委員会

つぎの3つのプロジェクトを推進する。

①外国語教育と国際理解教育（プロジェクトリーダー：石森広美）

②教員養成と国際理解教育（プロジェクトリーダー：橋崎頼子）

③地域の多文化化と国際理解教育（プロジェクトリーダー：南雲勇多）

(3) 国際委員会

2. 各委員会事業計画

(1) 紀要編集委員会

- ①韓国国際理解教育学会（KOSEIU）との交流・協力
- ②学会研究紀要での「国際委員会報告」分担執筆
- ③アジア太平洋地域GCED ネットワーク（ユネスコ・バンク事務所）との交流・協力
- ④APCEIU（アジア太平洋国際理解教育センター）との交流・協力
- ⑤日本ESD学会「ESDに係る国際交流活動に関する意見交換会」への参加
- ⑥「ユネスコカフェ」の創設

(4) 広報委員会

- ①ホームページの更新
- ②フェイスブックの積極的活用による広報展開
- ③ニューズレター 55号の発行（2022年11月発行予定）

(5) 社会連携事業

- ①JICA地球ひろばとの連携事業の推進
- ②日韓中ストーリーテリング・プロジェクトの推進
- ③APCEIU日韓教員交流事業の推進

(6) 「異己」プロジェクト事業

日中韓で実施してきた「異己」プロジェクトの推進

(7) 重点課題事業

- ①記念誌『国際理解教育の課題（仮題）』（Web 報告書）の作成
- ②「平和の文化」「平和とこころ」「平和と再想像」をテーマとする連続トークの実施
- ③2023年度のユネスコスクール（ASP）の70周年に向けた事業の実施

3. 韓国国際理解教育学会への参加

4. 事務局

- ①学会ホームページ改訂
- ②学会員の情報共有のためのメーリングリスト作成にむけた検討
- ③J-Stage公開準備
- ④新委員会活動の円滑な実施のための協力、会費納入率向上や新入会員獲得の取り組みなど

2022年度 日本国際理解教育学会収支予算書（2022年4月～2023年3月）

I. 収入の部

科 目	2021年度決算額	2022年度予算額	備 考	2021年度予算額
入会金	110,000	90,000	3000×30人	90,000
年会費	3,204,000	3,450,000	正380、学50、団7	3,450,000
雑収入	9	10,000	紀要販売等	10,000
当期収入合計 (A)	3,314,009	3,550,000		3,550,000
前年度繰越金	7,454,607	8,869,753		7,454,607
収入合計 (B)	10,768,616	12,419,753		11,004,607

II. 支出の部

科 目	2021年度決算額	2022年度予算額	備 考	2021年度予算額
1. 事業費	1,421,704	2,095,000		3,140,000
大会運営補助費	400,000	400,000	2023年度第32回大会会場校へ	400,000
紀要刊行費	500,000	500,000		500,000
会報刊行費	80,080	95,000		90,000
理事会費	107,904	0	オンライン開催	500,000
紀要委員会費	19,010	370,000		300,000
研究・実践委員会	212,972	350,000		350,000
国際委員会	0	150,000		270,000
広報委員会	100	50,000		520,000
国際交流費	0	0		60,000
重点課題事業	-	50,000		
異己プロジェクト事業	-	50,000		
学会賞	0	30,000		0
社会連携事業	0	50,000		150,000

2. 管理費	477,159	1,825,000		590,000
事務局経費	7,846	100,000	事務局引越し経費	10,000
事務局人件費	68,000	120,000	1,000×10h×12ヶ月	120,000
通信費	170,944	170,000		170,000
設備・備品費	0	0		0
消耗品費	9,454	10,000		10,000
会議費	7,431	0		50,000
旅費交通費	38,440	5,000		5,000
印刷製本費	41,800	380,000	学会封筒追加印刷費、旧研究・実践委員会報告書 印刷費、重点課題事業報告書印刷費	45,000
教育関連学会会連絡協議会年会費	10,000	10,000		10,000
雑費	3,940	10,000		10,000
HP管理費	21,670	30,000		30,000
J-stage 公開費		540,000		
HP改訂費		450,000		
選挙管理費	97,634	0		130,000
3. 予備費	0	150,000		60,000
4. 30周年特別事業費	0	0		50,000
支出合計 (C)	1,898,863	4,070,000		3,840,000
当期支出差額 (A)-(C)	1,415,146	▲520,000		▲290,000
次期繰越収支差額 (B)-(C)	8,869,753	8,349,753		7,164,607

学会規約の一部改正について

(2022.05.28 常任理事会、2022.06.10 理事会、2022.06.11 総会承認)

【改正理由】

- ・事務局移転による住所の変更

【改正内容】

(第12条) 新事務局住所への変更

現行	改正案
第1条～第11条 (省略)	第1条～第11条 (現行通り)
第12条(所在地・事務局) 本会の事務局を京都府京都市中京区西ノ京朱雀町1立命館大学大学院教職研究科森田真樹研究室に置く。	第12条(所在地・事務局) 本会の事務局を愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1名古屋市立大学大学院人間文化研究科曾我幸代研究室に置く。
2. 事務局には事務局長に加えて、職員を若干名置くことができる。	2. 事務局には事務局長に加えて、職員を若干名置くことができる。
3. 事務局に職員を置く場合は、正会員の中から事務局長が推薦し、理事会及び総会の承認を得る。	3. 事務局に職員を置く場合は、正会員の中から事務局長が推薦し、理事会及び総会の承認を得る。
第13条～第14条 (省略)	第13条～第14条 (現行通り)
	付則13(事務局移転に伴う一部改正) この規約は2022年6月11日から施行する。

理 事 会 報 告

● 2021年度選挙管理委員会

理事選挙にあたり、2021年10月7日(木)に第1回選挙管理委員会をオンラインにて開催された。理事会より推薦された織田雪江委員、南美佐江委員、山田文乃委員及び事務局長が出席し、山田文乃選挙管理委員会を選出するとともに、理事選挙に関する申し合わせ、スケジュール、実施方法等の確認を行った。投票締切後の2021年11月28日(日)に、第2回、第3回選挙管理委員会が立命館朱雀キャンパスにて開催された。第2回選挙管理委員会において、投票の状況及び開票の方針について決定をし、事務局長、事務次長同席のもと、山田選挙管理委員長、織田選挙管理委員、南選挙管理委員による開票作業が行われた。開票後、第3回選挙管理委員会を開催し、得票数を確定させた上で、「理事選挙実施の申し合わせ」に基づき、上位12人を理事候補者として選出した。また、就任辞退者がいることを想定して、次点候補者を確定させた。第3回選挙管理委員会の結果は、即日、学会長、副会長に報告をした。

● 2021年度後半期における常任理事会

『現代国際理解教育事典 改訂新版』(明石書店)の編集委員を常任理事が担うこととなったため、2021年度後半期における常任理事会は、編集委員会開催時に合わせて必要な審議・意見交換を行う形で実施した。

● 2021年度第2回理事会

2021年度第2回理事会が、2022年1月10日(月)にキャンパスイノベーションセンター東京にて開催された。委任状による出席者を含め、全理事が出席した。各委員会の活動状況、選挙管理委員会からの選挙実施報告、第30回研究大会報告及び第31回研究大会準備状況、紙面による総会審議の結果等が報告され、了承された。

● 2021年度選挙選出理事による打ち合わせ

選挙選出理事による打ち合わせが、2022年1月10日(月)にキャンパスイノベーションセンター東京にて開催された。次期体制における課題を共有した後、選挙選出理事の互選によって、永田佳之理事が新会長に、釜田聡理事、中山京子理事が新副会長として選出された。会長推薦理事や各委員会の新委員長等の新体制については、新会長・副会長が相談のうえで決めていくこととなった。

● 2021年度第3回理事会及び新理事による打ち合わせ

2021年度第3回理事会が、2022年3月27日(日)にオンラインにて開催された。委任状による出席者を含め、全理事が出席した。会長推薦理事や各委員会の新委員長等、2022年度から2024年度の学会新体制について審議し、承認された。また、現委員会から新委員会への主な引き継ぎ事項などを共有した。第3回理事会に引き続き、新理事による打ち合わせがオンラインにて開催された。新体制に移行するにあたり、現在の学会の抱える課題等を共有した。新委員会における活動方針については、各委員会において個別に行うこととなった。

● 2022年度第1回常任理事会

2022年度第1回常任理事会が、2022年5月28日(土)にオンラインにて開催された。第31回研究大会の準備状況、2021年度事業報告及び決算報告、2022年度事業計画及び予算案、2022年度から2024年度の学会新体制、学会規約の改正案、総会の議事内容等について報告、審議され、全ての議案について承認された。

● 2022年度第1回理事会

2022年度第1回理事会が、2022年6月10日(金)にオンラインにて開催された。第31回研究大会の準備状況、2021年度事業報告及び決算報告、2022年度事業計画及び予算案、2022年度から2024年度の学会新体制、学会規約の改正案、総会の議事内容等について報告、審議され、全ての議案について承認された。2022年度総会に上程する議案についても確認するとともに、前紀要編集委員会より第5回学会奨励賞について報告があり、11日(土)に開催されるオンライン総会後に授賞式を実施することが報告された。また、2023年度の第32回研究大会について、開催校を現在調整中であることが報告された。



事 務 局 通 信

学会事務局及び紀要編集委員会事務局移転のお知らせ

2022年6月11日に開催された学会総会におきまして、2022-2024年度の学会新役員体制が承認されました。それにとまない学会事務局及び紀要編集委員会事務局が移転いたしました。

(新) 日本国際理解教育学会事務局

〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 曾我幸代研究室気付

TEL : (052) 872-5154 E-mail: jaie.jimu.office@gmail.com

(新) 紀要編集委員会事務局

〒604-8520 京都市中京区西ノ京朱雀町1

立命館大学大学院教職研究科 森田真樹研究室気付

TEL : (075) 813-8154 E-mail: mmorita@ss.ritsume.ac.jp

日本国際理解教育学会第32回研究大会開催のお知らせ

開催日程：2023年7月1日（土）～ 7月2日（日）

・開催会場：名古屋学院大学（愛知県名古屋市）

・大会実行委員長：天野 孝輔 会員

*詳細については、学会ホームページやフェイスブックなどでご案内いたします。

研究・実践委員会よりお知らせ

研究・実践委員会では、現在、次の3つのプロジェクトに取り組んでいます。

1. 外国語教育と国際理解教育、2. 教員養成と国際理解教育、3. 地域の多文化化と国際理解教育

1は小・中・高の10年間の英語教育をどのように国際理解教育と絡め、接続・連携し、発展させていくのか、2は初等外国語教育や地域の多文化化を担う教員をいかに養成するか、が課題です。3は学校、地域、NPO、社会などのさまざまな場を通して多文化化する地域の教育を問うものです。プロジェクトに参加し、一緒に実践研究を行う会員を募集します。

①お名前②所属③メールアドレス④希望のプロジェクトをお書きになり、石森広美 (ishimori.hiromi@h.hokkyodai.ac.jp) まで（会報到着後2週間以内を目途に）ご連絡ください。定員になり次第締め切らせていただく場合があります。

年会費納入のお願い

2022年度の会費をまだ納入されていない方は、できるだけ速やかな納入をお願いいたします。納入いただいた方には、学会誌『国際理解教育』Vol.28をお届け致します。また、過年度の会費を未納入の方は、過年度分も併せて納入いただきますようお願いいたします。

- 正会員 8,000円 学生会員 4,000円 団体会員 30,000円
- 振込先（ゆうちょ銀行以外からの振り込みには店名、店番が必要となります）
ゆうちょ銀行から……記号00120-5、番号601555、加入者名：日本国際理解教育学会
他の金融機関から……店名：〇一九（ゼロイチキュウ）、店番019、預金種目：当座預金
口座番号：0601555、加入者名：日本国際理解教育学会

◆年会費を長期に未納されている会員の取り扱いについて

3年以上にわたり年会費を未納の場合には、退会扱いとなります。2022年度末の時点で、3年以上年会費が未納の場合には、退会扱いとなり、会員資格を失うこととなります。今後も、学会活動の継続をお考えの方は、必ず年度内に未納分の年会費を納入ください。

寄 贈 図 書

- 異文化間教育学会編『異文化間教育事典』明石書店、2022年
- 佐藤一子、大安喜一、丸山英樹、編著『共生への学びを拓く：SDGsとグローバルな学び』エイデル研究所、2022年
- 中村裕哉『板書&問いでつくる「社会科×探究」授業デザイン』明治図書、2022年
- 祐岡武志『世界史教育内容編成論研究：ESDの観点からの再構成』風間書房、2022年
- 吉田敦彦『教育のオルタナティブ：〈ホリスティック教育／ケア〉研究のために』せせらぎ出版、2022年

新 入 会 員

以下の33名が、2021年10月1日～2022年9月30日までに入会されました。

氏 名	所 属	氏 名	所 属
安 藤 理 恵	名古屋市立菊里高等学校	佐 藤 友 紀	兵庫教育大学
磯 谷 桂太郎	文部科学省	謝 敷 勝 美	宮古島市立久松中学校
梅 津 静 子	筑波大学	新 見 有紀子	東北大学
戒 井 七 重	横須賀市立大塚台小学校	末 佐和子	東京都立中野工業高等学校
大 崎 美 佳	広島女学院大学	奈 良 明日香	聖心女子大学大学院
岡 井 美咲希	広島大学大学院	西 田 拓 大	白浜町立白浜第二小学校
岡 田 亜矢子	早稲田大学大学院	畠 山 尚 之	大阪大学大学院
押 井 那 歩	九州女子大学	藤 井 美 香	上越市立東本町小学校
小 野 創 太	広島大学大学院	堀 江 理 砂	星槎大学大学院
萱 原 真 希	東京家政大学	光 又 隆 浩	常磐大学高等学校
河野辺 貴 則	四国大学短期大学部	南 優 希	関西学院大学大学院
木 間 明 子	東京都ユネスコ連絡協議会	三 牧 純 子	明治大学
木 村 泰 之	島根県立出雲高等学校	吉 田 敦 彦	大阪公立大学
草 間 啓	上越教育大学附属中学校	吉 野 華 恵	東京大学大学院
久 保 英 士	独立行政法人国際協力機構	米 山 尚 子	アデレード大学
高 雨	岡山大学大学院	Yang Lihwa	慶応義塾大学大学院
佐 藤 大 輔	上越教育大学附属中学校		

(50音順、敬称略)

事務局からの連絡とお願い

◆住所・所属等変更連絡のお願い

郵送物が宛先不明で返送されるケースが増えております。ご所属やご住所の変更がありましたら、事務局まで E-mail (jaie.jimu.office@gmail.com) にてご連絡いただきたくお願いいたします。

とくに、学生会員であった大学院生の皆さんが、就職などで引っ越しをされる場合に、郵便物の転送手続きをされておらず、学会事務局に返送されることが多くなっていますので、住所変更などについて、必ず事務局までご連絡いただきますよう、ご協力をお願いいたします。

また、会員身分の変更（学生会員から正会員など）がある場合にも、必ず事務局までご連絡ください。

◆学会誌『国際理解教育』バックナンバーの購入について

明石書店から発行されております『国際理解教育』の16号以降につきましては、お近くの書店にてご購入が可能です。事務局におきましても販売いたしております。ご購入をご希望の方はお気軽に事務局までお問い合わせください。会員価格でご購入いただけます。

◆『改訂新版 現代国際理解教育事典』の販売について

2012年初版の『現代国際理解教育事典』（明石書店）が、今年3月に『改訂新版 現代国際理解教育事典』として刊行されました。会員の皆様に会員価格にて販売いたします。2012年版と改訂新版ともにまだ残部がございますので、ご購入を希望される会員の方は、学会事務局（jaie.jimu.office@gmail.com）までご連絡ください。なお、残り部数も少ないため、ご希望にそえない場合もあります。

◆フェイスブックのご案内

学会からの発信ツールとして、これまでのホームページ (<http://www.kokusairikai.com/>) に加え、フェイスブックを活用しております。学会新体制において新設された広報委員会によって、最新の情報が提供されています。ご興味のある方は、是非フォローしてみてください。

◆新入会員ご紹介のお願い

日本国際理解教育学会では、随時、新入会の申し込みを受け付けております。学会ホームページよりダウンロードした入会申込書にご記入いただき、事務局までご送付いただければ、申し込み手続きが可能です。入会手続き方法の詳細は、学会ホームページをご参照ください。国際理解教育の研究や実践に興味を持たれている新入会員をぜひご紹介いただきますよう、よろしくをお願いいたします。

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様に関わられました図書などがございましたら学会にご寄贈下さい。紹介させていただきます。

編 集 後 記

「日本国際理解教育学会会報」第55号をお届け致します。

新型コロナウイルスの第7波は収束しつつあるようですが、度重なる台風や地震の被害、ロシアによるウクライナ4州の強制編入、日本の上空を通過するミサイル・・・と、穏やかとはいえない日々が続いています。被災された方々、避難されている方々に、心よりお見舞いを申し上げます。

学会はこの6月より、2022年度～2024年度の理事会・委員会体制でスタートしました。広報委員会も中山京子新委員長をはじめ新しいメンバーとなりました。学会の情報を、この会報、HP、Facebookなどで、会員ならびに社会にできるだけ速やかに公開、提供して参りますので、どうぞよろしくお願い致します。

(広報委員会副委員長 福山文字)